

# ほぼ月刊 桑名歴史こぼなし

Vol.2(平成最終号) 2019年4月30日発行

編集・発行:©社会福祉法人 桑名市社会福祉協議会 文化スポーツ振興課 TEL0594-22-8311

## <桑名とオリンピック>

令和2(2020)年7月24日、東京で**第32回オリンピック競技大会**が開会します。**六華苑**で撮影されたNHK大河ドラマ「**いだてん～東京オリムピック噺～**」では、昭和39(1964)年に開催された前回の東京オリンピック(第18回)がテーマとなっていますが、桑名市でもこれまでに少なくとも8名(以下敬称略)の関係者が夏季大会に出場しています。

オリンピック出場選手を**オリンピック**といい、その親睦団体として平成15(2003)年9月3日に**日本オリンピックズ協会**(東京都渋谷区、名誉会長竹田恒和、会長鈴木大地、理事に**瀬古利彦**)が組織されています。今回は桑名にゆかりのオリンピック2名を紹介します。

## <ミスター・バスケットボール諸山文彦>

桑名に関係する最初のオリンピックは、**桑名高等学校**出身の**諸山文彦**(1943～)です。四日市市に生まれ、東橋北小学校(現在の橋北小学校)でバスケットボールをはじめ、橋北中学校を経て昭和34(1959)年4月に桑名高等学校普通科へ進みました。当初は陸上部に所属しましたが、すぐにバスケットボール部に移って実力を伸ばし、**日本大学**在学中に東京オリンピックに出場しました。予選では銀メダルとなるソビエト社会主義共和国連邦(現在のロシア連邦)と同じAグループで戦い、最終的に10位となりました。大学卒業後は**日本鋼管**(現在の**JFE エンジニアリング**)に入社して実業団で活躍しました。現役引退後は日本実業団バスケットボール連盟理事長、日本バスケットボール協会(東京都文京区)常務理事などを歴任しました。

## <マラソン女子日本代表を指導した鈴木従道>

東京に続く第19回大会はメキシコシティで開催され、**東洋ベアリング製造**(現在の**NTN**)陸上競技部の**鈴木従道**(1945～)が出場しました。鈴木は栃木県塩谷郡塩谷町出身。矢板高等学校(栃木県矢板市)を経て**日本大学**に入学し、在学中は**箱根駅伝**に4回連続出場(3区・9区・2区・2区)し、3回の優勝を経験しています。昭和43(1968)年4月に東洋ベアリング製造に入社し、同年10月に陸上1万メートル日本代表として出場して21位となりました。

昭和63(1988)年4月に**ダイハツ工業**の女子陸上競技部が創部されると監督に就任し、マラソン日本代表の**浅利純子**(1969～、現在は高橋姓)や**小鴨由水**(1971～、現在は松永姓)といった多くのアスリートを指導し、平成16(2004)年11月をもって定年退職しました。

実は桑名にはまだまだオリンピックがおり、スポーツ分野での活躍ぶりは目覚ましいものがあります。平成31(2019)年4月1日に**桑名市社会福祉協議会**が**桑名市文化・スポーツ振興公社**の事業を引き継ぎ、文化スポーツ振興課を新設し、本紙発行もスタートしました。開催まで500日をきった東京オリンピックに桑名の関係者が出場することも期待したいですね。

# ほぼ月刊 桑名歴史こぼなし

Vol.3(改元記念号) 2019年5月1日発行

編集・発行: ©社会福祉法人 桑名市社会福祉協議会 文化スポーツ振興課 TEL0594-22-8311

## ＜アジア大会銅メダリスト三浦信由＞

メキシコシティで開催されたオリンピックには**東洋ベアリング製造**（現在の**NTN**）陸上競技部からもう一人**三浦信由**（1944～、旧姓松田）が出演していました。三浦は大分県宇佐郡院内町（現在の宇佐市）に生まれ、竜頭中学校（現在の院内中学校）在学中に陸上競技で好成績をおさめ、当時強豪校だった**四日市農芸高等学校**を経て**東洋大学**に進みました。

在学中は**鈴木従道**と同じく4回連続で**箱根駅伝**に出場（1区・1区・7区・7区）しました。当時指導にあっていたコーチ**加瀬忠**（1941～）のホームページ「マドリッド通信」の「私の箱根駅伝回想録」（2019年4月1日最終更新）には「元気の良い松田信由」として登場し、第42回箱根駅伝の最終エントリー前に行った20kmのタイムトライアルでは61分50秒でトップだったことが記されています。昭和41（1966）年12月にはタイ王国の首都バンコクで開催された**第5回アジア大会**で3,000m障害物に出場して**銅メダル**を獲得しました。

昭和42（1967）年4月に東洋ベアリング製造に入社し、すぐに結婚して松田姓となりました。翌年には3,000m障害物日本代表としてオリンピックに出場しましたが、予選突破はなりません。帰国後に東京から桑名工場に異動して**東方**の社宅で暮らし、昭和45（1970）年5月に国立霞ヶ丘陸上競技場（東京都新宿区）で開催された**第54回日本陸上競技選手権大会**の同種目では優勝して**日本一**に輝きました。30歳で現役を引退してからは営業畑を歩み、九州支店の営業部長を最後に定年退職し、現在は地元大分でゲートボールにいそしんでいます。これまでの輝かしい記録によって日本学生陸上競技連合からは勲功章を授与されています。

## ＜マラソン世界一の瀬古利彦＞

桑名市出身者で初めてオリンピックに出場したのはマラソンの**瀬古利彦**（1956～）です。瀬古は**友村**で鉄工所を営む家に生まれ、**久米小学校**から**明正中学校**に進みました。正和中学校の創立は昭和47（1972）年4月25日のことであり、当時は久米小学校の生徒も卒業すると明正中学校まで通っていたのです。平成2（1990）年6月16日、明正中学校の体育館完成式に伴う記念講演では「毎日遅刻しそうだったから走っていたところ足が速くなりました」と冗談を交えて話しました。

明正中学校では野球部に所属していたものの、俊足を見込まれて二年生のときに陸上部の助っ人として三重県中学校陸上競技大会学校対抗選手権の2,000mに出場したところ、**三重県記録**で優勝し、**四日市工業高等学校**では陸上競技部に所属しました。ここでも**全国高等学校総合体育大会（インターハイ）**や**国民体育大会**で優秀な成績を飾り、陸上競技の強豪**早稲田大学**への入学を志しました。しかし、受験に失敗し、**南カリフォルニア大学**に留学して翌年に合格しました。

大学では競走部に所属し、監督**中村清**（1913～1985）の指導のもと、**箱根駅伝**では4年連続で2区を走り、**区間記録**を樹立しました。昭和52（1977）年2月13日、**京都マラソン**で初めてのマラソンに挑戦し、10位となって**新人賞**を獲得しました。以降の活躍は次号で紹介します。